變

徳川家康

百雷落つるの巻・蕭風城の巻

山岡荘八

講談社

徳川家康　第十五巻　百雷落つるの巻　蕭風城の巻　昭和四十年十月二十日第一刷発行　著者　山岡荘八　発行者　野間省一　印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　横田製本株式会社　発行所　株式会社講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九　振替東京三九三〇　電話東京(九四二)一一一一(大代表)
©山岡荘八　一九六五
定価　六百二十円

徳川家康 15

百雷落つるの巻
蕭風城の巻

目次

百雷落つるの巻

都鳥　七

狂気の正気　一七

地鳴り　三八

先進国日本　六〇

火星木星　七五

啓蟄　九五

流れ聖者　一一六

悪の良心　一二八
羊と狼　一三九
一期一会　一四九
霜の叛骨　一六五
毛虫の生命　一八四
火山活く　一九六
五柳の根　二〇八
万雷落つ　二二三
陰謀以上　二四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蕭風城の巻

巨城の呼び声　二五八
深夜の評定　二七〇
六文銭系図　二九一
桐の片桐　三一二
紀伊見峠　三三〇
鐘の前奏　三四六
不殺刀　三五七

付録（参考地図及諸家系譜）

装幀　稲垣行一郎
挿画　木下二介
箱裂地　麻地草花人家文様茶屋染
提供　山口勉
表紙金版　徳川家康直筆署名

徳川家康

百雷落つるの巻

蕭風城の巻

百雷落つるの巻

都　鳥

一

松平忠輝は、自分と同年輩の豊臣秀頼が、いよいよこの三月、千姫とほんとうの夫婦になるという知らせを母の茶阿の局から受け取って、何となく擽(こそば)ゆく、何となくおかしくてたまらない気がした。

（そうか、内府もいよいよおれと同じ経験をするのか）

それはようやく大人になったばかりの男として、祝ってやってよいのか、窮屈さに同情してやってよいのかわからなかった。

「何をお一人で笑っておわしまする」

彼の眼の前には一足先に、ふしぎな綱で彼をしばった新しい奥方の五郎八(いろは)姫が端然として坐っていた。

「う、何でもない。都鳥どもが、あまり寄り添うて泳いでいるゆえおかしくなったのだ」

隅田川に面した座敷の縁をひろく開けさせ、ゆったりと酒盤の前にすわった松平上総介忠輝は、六尺近い体格で、眼つき、骨組みとも、もう立派な若殿ぶりであった。

忠輝はむろん知らない。が、家康の側近の者も、将軍秀忠の家老たちも、忠輝を見ると一様に云った。

「――ご嫡男の次郎三郎信康さまに生き写しにござりまする」

生母の茶阿の局は、この褒め言葉を好かなかった。信康が、不運な築山御前の産んだ子であり、そして信長に悲しい詰腹を切らせられた悲話の主だからであろう。

しかし、忠輝は、そのようなことは意に介しなかった。いや、却ってそれが得意そうでさえあった。

信康は、短気であったが武勇抜群、器量は父に劣らぬものという追懐談をしばしば聞かされているからだ。

「――その兄上が今生きておわしたら、どのようなことをなされているかの」

そんなことをいったり、

「――殊によると、お父上があまり兄上を惜しませられるので、神仏がおあわれみなされて、再びこの忠輝として生まれ変わらせてくれたのかも知れぬ」
などと、自分から信康を気取ったりした。
しかし、この信康気取りを、茶阿の局は仰天してこれを止めた。
「――決してそのようなことを、軽々しくお口になされてはなりませぬ。もしも、将軍家にわたらせられるお兄上さまのお耳に入ったら何となされまする」
しかし忠輝は、一笑に付していった。
「――まさか、兄上が、わしに叛心ありとも思うまい。よいよい、慎しもう」
そうした忠輝だけに、伊達政宗の愛姫が入輿して来る前に、もう女性は知っていた。
家臣久世半左衛門の娘で阿竹と云ったが、阿竹に手をつける時忠輝は、
「――わしは、女子と交ってみようと思うが、その方相手を致すかどうじゃ」
大声でそう云ったというので、いまだに女たちの一つ話になっている。
そうした忠輝の許へ、伊達政宗の自慢の姫で、切支丹信者の奥方が、きびしい戒律と共に嫁いで来たのだ。忠輝にとっては、かなり窮屈で気詰りだったのに違いない。
「何で、都鳥がより添うて泳いでいると、おかしいのでござりまする」
「ううむ。わしと、お方のようだからな」
「それならば、少しもおかしゅうはござりませぬ。あの鳥も夫婦(みょうと)ゆえ寄り添うておるのでござりましょう」
「ふうむ。では、内府もそろそろ寄り添うているかのう」

二

五郎八姫は、忠輝の言葉にしんけんな表情で首をかしげた。
「殿の仰せられますること、わらわには合点が参りませぬ」
「そうか……どう合点がいかぬのじゃ」
「秀頼君が、ご簾中さまに、寄り添われてはならないのでございましょうか」
「いや、いいだろう。わしは構わぬ」
「わらわは殿のことを申し上げたのではありませぬ。秀頼君のこと……秀頼君は、ご簾中に寄り添われては、迷惑なわけがあるのでございましょうか」
「さあ……あるかも知れず、ないかも知れぬなあ」
忠輝はちょっとあしらいかねた形で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「それよりお方は、あの、大久保長安……長安爺を好きかどうじゃ」
「殿のご家来ならば、嫌いでも、好かねばならぬかと存じまする」
「それそれ、それじゃ。秀頼君もな、千姫どのを嫌いでも、好かねばならぬ……と、思うて居るやも知れぬぞ」
「殿……」
「何ごとじゃ」
「殿も、わらわを、そう思うて、おいでなされまするか」
「あ……又、わしの方へ話が戻った……わしは違う……わしは、そなたが大好きじゃ」
そう云ったあとで今度はギクリとして姫の顔へ視線を止めた。
「お方は……わしが良人ゆえ、嫌いながら好かねばわるい……と、思うて居るな？」
その不安は、忠輝がすでに姫を愛しだしている証拠であったが、姫は、忠輝以上に正直だった。
「嫌い……というではござりませぬが、はじめは、怖い殿……と、思いました」
「怖い殿……このわしが」
「はい。その強い眼で見詰められると、胸の鼓動が止りそうな気がしました。でも……」
「でも……？」
「そのわりに怖いお方ではない。心の底はやさしいのだと……」
「そうか。そのやさしさがわかったか……それならば、先ず先ず芽出度い」
姫のうしろに従っている侍女たちが、面を伏せてクスクス笑いだしたが、忠輝はかくべつとがめようともしなかった。
「秀頼君は、わしより、またひとまわり背が高くての。あれで肉付きがようなったら、天下の豪傑といった風貌じゃ」
「殿も、そのように見えまする」
「そうか。でも、正直に申すとな、千姫どのはひどく小柄、お方のように大柄でおっとりとしている方が、忠輝は好きじゃ」
「殿！」
「なんじゃな」
「殿は、秀頼さまがお好きでは？」
「そうだ。嫌いではない。年齢ごろも同じだからの」
「でも、あまりお好きと仰せられない方が宜しゅうございます」
「何故じゃ？　それは……」

「越前の宰相さまは、ご生前、事毎に秀頼を好きじゃとお口になさるので、家老衆に嫌われたそうにござりまする」
「それは、誰に聞いたのだ」
「実家の父上に聞きました」
政宗の名が出ると忠輝の眼は、悪戯ッ児のようにクリクリ動いた。

三

「陸奥守どのはあれでなかなか細心のお方じゃ。鋭い人物評をなされての」
忠輝は、すかさず言葉の伏線を張っておいて、
「どうじゃな、豊太閤のことを、何と評しておられたぞ」
「はい」
五郎八姫は相変わらず、何の疑念も持たぬといったのどかな表情で、
「羨やましい育ちのお方……と、申して居りました」
「なに、豊太閤が羨やましい育ち……？　尾張の中村の貧農の家に産れ、幼いおりからあちこち子守奉公などにやられたという豊太閤を、何で羨やまれたのだ」
「嬰児は負わされても、肩に何の荷物もない。それゆえ身軽で、思うままに飛び歩けた。タンポポの花のようにフワフワと……それゆえ羨やましい限りのお方……と、申されました」
「タンポポの花のように……？」
「はい。それに比べて、大御所さまや、わしなどは、産れた時から一族郎党の運命という、逃げようもない重荷を結いつけられて、脇眼ひとつふれず、息もつけなんだ……」
「姫よ。それならば、わしのことは何と申して居られたぞ。定めて、お許に、わしの人物評もしたであろう」
忠輝のききたいのは、実は、豊太閤の人物評などではなく、婿の自分を、政宗がどのように姫に話していたかということだった。
姫は、はじめて、おかしそうに笑った。
「何がおかしいのだ。この忠輝は、滑稽な男だとでも聞かせたのか」
「いいえ、そうではありませぬ。もう少し早よう生まれてくればよかったのだといわれました」
「もう少し早よう……」
「はい。そうしたら今ごろ兄君の将軍家など、頤で使うていたかも知れぬと……」
「フーム。すると、悪しざまに申したのでもないか」
「はい。その代わり、褒めたのでもない……と、わらわは思いました」
「なぜだ」

「そのあとで、いまに退屈して、何をやりだすかわからぬぞといわれたからでございます。大久保長安どのと殿とでは、狐を天馬に乗せて空に放つようなことになりかねない。わしも、とんだ天馬の手綱を預けられたものだといわれて、嘆息なされました」
「な……なんだと!?　わしは天馬……」
「はい。大久保長安は、それに乗った狐だそうでございます」
「姫！」
「はい」
「そなた、その父の批評が、違うて居るとは思わなんだか」
「さあ……？」
「さあ……というのは当たっていると思うのだな」
「当たっているようなところもございます。でも、当たっていないようなところも……」
「もうよい！　しかし、なんで陸奥守はそのように申されたのであろうかな」
「お父上の手には負えないところがある……そう見たからでございましょうか」
「フン、何れにせよ、あまり香ばしい批評ではない。そのようなことは他言するな」
苦々しい顔になって盃を取り上げた時であった。
「殿！　お人払いを願わしゅう」
あわてて入って来た花井遠江守が、蒼白な表情で忠輝の前に平伏した。

四

花井遠江守は、忠輝の異父姉に当たる茶阿の局の娘を妻にしている、いまは海津城の城代家老であった。
それが江戸へ出て来ているのは、いよいよ忠輝が、川中島の旧領に加えて、越後の福島城主、堀忠俊の領地を併合して、六十万石の大々名になることに決定したため、その打ち合わせに出て来ているのであった。
越後の福島城は高田より少しく離れた直江津の北にあった。
そこには豊太閤の旧臣堀秀治が北陸の押えとしておかれていたのだが、当主忠俊の代になって領内に内紛が絶えず、忠俊は、幼少でその統治が出来ないというので、磐城国に移され、伊達政宗の婿の忠輝がこれを統治することになったのだ。
そうなると、新旧併せて六十万石の大藩となり、花井遠江守は信州の川中島に残り、大久保長安が諸事伊達政宗と相談して、新政の基礎を築かなければ……というところで

あった。
その花井遠江守が顔いろ変えてやって来てお人払いを申し出たのだから、何か大事が起ったのに違いない。
遠江守の最初の挨拶で、女たちは席を立った。
「何事じゃ。お方も同席せぬがよいと申すのか」
忠輝は、ゆったりと構えて動こうとしない五郎八姫の方を見やって訊ねていった。
「はい……いや、奥方さまは、そのままでよろしゆうございましょうかと……」
遠江守も、姫には一目おくといった形で語尾を濁し、
「実は、大久保長安どの、卒中にて、当分身動きもならぬ由にございまする」
「なに、長安が卒中じゃと!?」
「はい。日ごろの豪酒が祟ったものかと……それにしても越後の新領へお移りなさる大切なとき……困ったことにございまする」
「フーム。長安めが、選りに選ってなあ」
「生命には別状あるまい。ただし困ったことがあると、小田原の大久保殿より、急遽の知らせにございまする」
「困ったこととは、病で倒れた他に、何ぞ事情があるというのか」
「はいッ」
「よし申せ。遠慮はいらぬ。姫は予が妻じゃ」
「されば……実は、あの連判状のことにございまする」
「なに、連判状……連判状とは何のことだ」
「これはしたり、長安どのが考えた世界の海へ乗り出すという……」
「あ、あれか。あれが、どうか致したのか」
「はい、あれには、大久保忠隣(ただちか)さまはじめ、大坂城の秀頼さま、越前のご先代さまなどみなご署名なされておわしまする。ところで、それにつき、近ごろあらぬ風評が、江戸城内に立ってござるとか」
「どのような風評じゃ」
「はい。それが……」
「遠慮はいらぬ。申せといったろう」
「それが実は、甚だ悪意のこもった風評にて……実は、わが君はじめ、連判の方々は、当今将軍家のご政治にあきたらず、謀叛を企てる下心……いや、そうした連判状があるそうな……という、風評の由にございまする」
それを聞くと、忠輝はあざ笑った。
「何だ詰らぬ。そんな事か……そんな事より、長安の病気、再起出来るのか、出来ぬのかッ」

五

忠輝が、連判状のことなど少しもこころに掛けていないとわかると、花井遠江守は、ホッとしたり、逆に心配になったりした。

（風評のようなことは断じてない……）

そう思うと同時に、事実の如何にかかわらず、これが何かに利用される場合もあるという不安であった。

「恐れながら、殿は、近ごろ大久保、本多の二宿老が、至って不仲のよしの取沙汰、お耳になされてござりまするか」

「というと、本多上野父子と、大久保忠隣がことか」

「御意にござりまする。世間の噂では両宿老、遠からず激突は避けられぬ。何れにも用心して加担するな……などと、専ら警戒してあるよしにござりまする」

「それとこの忠輝と何のかかわりがあると申すぞ。わしはそなたに、長安が病状をたずねているのだ」

「恐れながら、遠江もそれにお答え申し上げているのでござります。大久保長安どのはご存知のとおり、大久保相模守忠隣さまご推挙によってご出世なされたものでござりまする」

「あ、そのことか」

「さように軽く仰せられず、よくお聞きとりを……そして、姓まで相模守より頂戴してあるほどの間柄、仮に何ぞ長安どのに手落ちもあらば、本多父子は、得たりかしこしと大久保忠隣さま攻撃の材料になされましょう」

花井遠江守は、自分の不安を必要以上に誇張して、

「私の案ずるのは、その一点にござりまする」

「フーム」

と忠輝は、淡白に頷いた。

「つまり、長安が病気で倒れた。そのおりに連判状が世に現われ、あらぬ噂が飛んでは、大久保忠隣が迷惑する……と、こう申すのだな」

「これはしたり、若し、その連判状が、両者の争いのタネにでも相成りましては、迷惑致すのは、相模守忠隣さまだけではござりませぬ。殿のお名も出れば、大坂の秀頼さまも、越前のご先代秀康さまのお名前もみな出て参りまする」

「よいよい。その時には、予が直々みなに説明してやるわ」

「殿！」

「何じゃ。おかしな顔をして」

「では念のために伺いまするが、この連判状を利用して宿老の一方を蹴落さんとして、若しもこれを大坂方と結んだご謀叛の連判状……などといいふらされましたる節は、何となさるご所存で」

「なに、大坂とわれ等が結んで……」

そこまでいうと、さすがに放胆な忠輝の顔もちょっと緊った。
連判状の前文に何が書いてあったかなどはよく覚えていなかった。
むろん謀叛だの、大坂と結ぶだのという、そんな考えなどあろう筈もなかったので、かくべつ気にも止めずにいたのだ。
「フーム。すると、長安が病気で……いや、死ぬ場合もあるかも知れぬな。すると死人に口なしで……なるほど、おかしな疑いを受ける場合があるやも知れぬ……」
「殿！　それゆえご微行でなりと、とにかく八王子まで、長安どのをお見舞い頂きたいのでござりまする」
遠江守は、声を硬ばらせて両手を突いた。

六

「そうか。そうなると見舞いが先か……」
忠輝は、ちょっと緊張したようだったが、すぐまたもとののどかな顔に返って、
「遠江の申し条にも一理ある。どうじゃ姫、八王子へ参ってみるか？　お方ならば何とするぞ」
姫の方は、忠輝よりも又一段と鷹揚だった。
「殿が、お連れ下さるならば……」
「そうじゃ。陽気も日増しによくなる季節じゃ。あちこちの花など訪ねながら参ってみるか」
そう云ってから、忠輝は、ちょっときびしい顔になって、
「これは内証じゃぞ遠江。表面はどこまでも長安が病気見舞い……松平上総介忠輝は、家臣想いのこころの厚い男なのだ。旗本どもなどに、お父上や兄上に告げ口されてはたまらぬからの」
この言葉は、家康の顔を想い出しての云いわけだったが、花井遠江守は、それにも気のついた様子はなかった。
彼は大久保長安とは反対に、一つのことを考えだすと、そのことから一歩も外に踏み出せない男なのだ。
「では、長安を見舞うたあとで、その連判状、必ずお持ち帰り下されますよう」
「とゆうて、長安が何処にしもうてあるか？　意識もないようであったらそれも叶うまい」
「そのおりには、家族に命じて家探しなどさせるのでござりまする」
「面倒じゃな。よし、では、その方も一緒に参れ。その方まで連れて見舞いに参った……そう聞いたら長安も家族も喜ぼうぞ」
忠輝は、結局連判状など、さして恐れてはいないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com